

執筆

33人

@短信

岡崎 正明 新連載

お付き合いを始めて、はや干支が3周目に突入した。「自分」とである。

はっきりって自分大好き。おかげですぐ甘やかすので困る。何も課題がないと、楽な方へ流れてしまうのは、生き物のサガだろうか。

編集長からマガジンの話を聞いて、参加させていただいたら、仕事を客観的に見直したり、それを人様に発信する力が身に着くのでは？少なくとも努力するのは？と考えた。

ダラダラが好きなくせに、目標は高い。こういう人間は、努力しないといけない環境に身を置くのが1番だ。ダイエット然り。「マガジンの締め切り」というハードルを自分に与え、「よしよし」と勝手にほくそ笑む。あとは過剰なご褒美を与えればいつものパターンだ。

多少なりとも興味をもたれた方は、しばしお付き合いを。けっこういいヤツなんですよ、これが。

牛若 孝治 新連載

初めまして。牛若孝治と申します。このたび、編集長にお願いして、「トランスジェンダーをいきる」を連載させていただくことになりましたのでよろしく申し上げます。2012年3月、立命館大学大学院応用人間

科学研究科修士課程を修了しました。その際、視覚障害・FtM(Female to Male)トランスジェンダーの自己のライフストーリーの中で構築してきた自己の男性性のあり方を、「自己物語の記述」という方法で修士論文にまとめました。実際に、身体障害とトランスジェンダー(性同一性障害)を併せ持つ人がどれくらいいるかはわかりませんが、私のような生き方をしている人がこの社会に存在していることを知っていただくために、連載しようと考えました。現在、立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程に進学しています。趣味は、マラソン・筋トレ・自己の見た夢を小説や演劇・創作ダンスにすることなど多数です。連載に当たっては、長期戦が予想されますが、どうかよろしく願います。

袴田 洋子

私は埼玉県朝霞市というところに住んでいます。「地域福祉を考える市民の会」という会に、最近、参加させてもらうようになりました。

行政主催の「地域福祉計画」に関する委員会で知り合った市民代表の人たちが、委員の任期が終わった後も勉強を続けていこうという有志のもとに発足した会だそうなので、「地域づくり」に熱心な方達の集いに、今、とても刺激を受けています。

これまで私は「仕事」として、地域という在宅にいる方の介護や療養生活に関するお手伝いをしてしていますが、本記事で述べているように、他者評価を得たいために援助職をしているのかどうか、今でも悩むときがあります。

でも、この市民の会に参加していると、「明日は我が身」という気持ちが強く感じられ、人からどうこう思われるために、じゃなくて、自分たちのために、と、しっかり思えて、ちょっと居心地がいいです。「市民の会」が主催する7月に行うシンポジウムで、在宅介護の事例をパネリストとして紹介する予定です。

独立自営でふだん、ひとりで仕事をしていて、子どももない自分は、仕事がらみでなく、一人の住民として「地域」の人と知り合いになれたことが、嬉しいです。

乾 明紀

マガジンへの2回目の投稿となる原稿を書き終えて、立命館大学に向かおうとしている。そこでは、「どんな環境に身を置けば人は積極的になるのか」なんてことをテーマにあれやこれやと考えるのがお仕事である。人は一人ぼっちだと積極的にはなれないもので、私もこのマガジンのお陰で「書く」ってことが積極的になってきた。

國友 万裕

この頃、エスニック料理に凝っています。これまで、トルコ料理、フランス料理、スペイン料理、タイ料理、マレーシア料理、ベトナム料理、メキシコ料理、モロッコ料理などを食べました。色々な人と食べに行くのですが、最近、映画好きの友達ばかり数人集まって、2か月に一度くらいのペースで、食べながら、楽しく映画の話に花を咲かせています。次は、イラン料理の予定です。というのが、イラン映画『別離』に大感激したからです。

そんなわけで、かつては引きこもりだった僕ですが、映画友達はしっかりつかまりました。今、欲しいのは、スポーツ友達。僕はキャッチボールができないので、それが今でもコンプレックスです。元々運動音痴で、そのコンプレックスを解消しようと、21の頃からプールに通っていて、水泳はできますが、キャッチボールは相手がいないと練習できないんですよ(泣)。誰か付き合ってくれる人、募集中。でも、相当下手なので、上手い人よりも下手な人で、相手になってくれる人募集です(笑)。そういう人がいたら紹介してくださいね。

それと、宣伝になりますが、5月10日に共著『越境する文化』(英光社)が出ました。僕は『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』について書いています。こちらも、ご一読ください。

鶴谷 圭一

ツルヤシュイチ(原町幼稚園 園長)

前号で障がい児の受け入れについて短信を書いておりましたが、昨年の受け

入れの時点で在園 2 名に加えて、新たに 3 人の障がいを持った子どもが加わるということで、教員を増員して体制を整えておりました。ところが、2 人はとても良く発達して手がかからなくなり、入園した 3 人もそれほど手がかからず、先生の手が足りすぎている状況になってしまいました。

なかなかうまくいかないものですが、子どもが発達することこそ私たちの仕事なので喜ばしいことだと、手が空いた先生はせっせと掃除をしております。

<http://www.haramachi-ki.jp>
メール:osakana@haramachi-ki.jp
ツイッター:haramachikinder

河岸 由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし
主宰 (臨床心理士)

先日 10 年ぶりに海外に行った。その時のことをちょっと書こうと思う。

ボストンが目的地だったが、直行便はとれず、トロント経由で往復取った。成田からトロントの機中、まず驚いたのがエグゼクティブ・クラスの椅子。こんな形の椅子を見たことが無かった。一人分の座席がブースのようになっていて、曲線で仕切られている。今ウラシマを感じた瞬間だ。機内サービスは特に驚かなかったが、カップヌードルは意外だった。正直余りおいしくなかった。12 時間余りの飛行時間を終えてトロントにつき、そこで US の入国審査と税関検査があった。US の検査をカナダで済ませてしまう。アメリカ人にしてみれば合理的なのかもしれないが、さて、税関検査では、申告書のみチェックでバゲージを開けることもなく、まずびっくり。入国審査では、指紋の採取があって又びっくり。10 年前はなかった。しかもボストン行の便が出る時刻になっても入国審査は長蛇の列。スタッフにかみつく人、ため息をつきながら待つ人。入国審査をクリアしてゲートに行ったら、結局フライトは遅れていて十分間に合ったし、乗った後も数名の到着を待って更に待った。まあ、日本の航空会社でも、自社便のコネクションの場合、入国審査で遅れる人が沢山いれば待つだろう。納得してボストンに向かった。

ボストンでは友達との旧交を温め、ロブスターに舌鼓を打ち、ハーバード・スクエアの昔からあるチョコレートショップで土産を買い、短い滞在時間があっという間に過ぎ去った。ボストンは 10 年前とほとんど変わらなかった。

そして帰路。空港で待っていたら、トロント行の便が 1 時間遅れに。乗り継ぎ時間が 1 時間ちょっとだったのでミスコネクションの可能性大で、空港係員とコンタクトをとったものの、別便へのトランスファーも難しく、取りあえずトロントまで行くことになった。私のほかに初老の日本人ご夫婦が同じ便に乗ることになっていて、とにかく 3 人トロントに到着。私の頭の中では当然地上係員は了解しているものと思ったが、誰も知らない。係員に申し出たところ、税関を通過して行ってみると言われ、大急ぎでゲートに向かった。出発 15 分前に到着したので、ぎりぎりなのは分かっていたが、ゲートにつくと同時に乗る筈の飛行機が **オンタイム** でゲートアウト！大ショック！！日本だったら自社便のコネクションで、この時間内であれば当然待たせよう。

結局ご夫婦と 3 人、市内のホテルに 1 泊する羽目になった。それから荷物を引き取るまでなんと 1 時間もかかり、やっとホテルに入ったのが午後 5 時過ぎ。日本時間で朝 4 時と言う時間だったので、連絡も出来ないからと、自棄のやんばちでトロント観光に行つて気分転換。ホテルに 7 時過ぎに戻り、1 日分の仕事を全部キャンセルするため、あちこちに電話やメールをして、やっと一息。翌日の便は平和に **10 分遅れ** で出発し無事日本に帰ってきた。(この怒り、分かってもらえますか?)

中村 周平

先日、いつも自身の生活を支えてくれているヘルパーの方の結婚式に行かさせていただきました。支援に入ってくれるようになってから、あっという間に仲良くなりました。彼と私を繋いでくれたのは「ラグビー」でした。2 つ下の彼も中学校からラグビーを始めたラグーマンでした。自身が出場していた試合も観たことがあるとか。同じようにグラウンドを駆けまわり同じように

泥だらけになりながら楕円球を追いかけたい経験が、お互いの距離をぐっと縮めてくれたんだと思います。結婚式も本当に幸せそうでした。

結婚おめでとう！絶対幸せになってよ！！

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>) 代表。

今年度、新たに文科省の「生徒指導・進路指導総合推進事業」の受託が決まりました。これで今年 8 年目となる京都府教育委員会の「フリースクール連携推進事業」、4 年目となる京都府青少年課の「若者自立支援訪問事業」とあわせて 3 つの公的事業をお引き受けさせていただくことになりました。

思い返せば、すべて私たちの活動は、たまたまアウラへとやってきた子どもたちのかかわりの中から広がってきました。「目の前にいる子どもをどうするか」が、すべての活動の原点でした。私たちは日々の実践を粛々と重ねながら、理論を介してそれらを評価し、再び実践の中へと落とし込むという循環をただひたすら続けているのです。

村本 邦子

月曜の授業の後、「なんかしんどいな～」と思っていたら、風邪だったようで、火曜から熱が出た。ふつうに仕事はしていたが、さすがに夜は早く寝るようにしていたので、予定が狂って、私にしては珍しく、締切前夜になって原稿を書いた。それにしても、なんて私はまじめな性格なんだろうと、つくづく呆れている。原稿にも書いたが、私はこれまで仕事を休んだことが皆無に近い。決して病気になるわけではなくて、病気になっても、ふつうの顔で仕事をする。いい加減この性格をやめようと思って、間もなくヒンシュクな理由で仕事を休んでみる予定だが、どう転んでも誰かを困らせるような休み方はできまい。死ぬときくらいは心残りなく人々に迷惑をかけてやろうと密かに思っているの、お楽しみに(もっとも私の砂時計はまだひっくり

返したばかりなので、みなさんの砂より多
いかも!?)。

荒木 晃子

最近、身辺が“わさわさ”している。
昨年、立命館大学で開催した「不妊と家
族のシンポジウム」に続き、本年も同大学
で、9月1日(土)「不妊患者団体(iCSI)国
際会議」を開催予定だ。去年は主催した
立命館の研究者として、さらに今年は、国
内の不妊患者団体のメンバーとしても、会
議の開催に関わることになる。ちなみに、
「不妊+生殖医療×海外=生殖ツーリス
ムの問題」という方程式も一部にあるが、
私の研究テーマは「人を援助すること」。
問題の中心に潜む当事者支援に尽きる。
ゆえに、周辺の雑念に惑わされることは
ない。今回、世界30か国の不妊患者団体
が加盟するという国際不妊患者団体創立
以来、初めて一般に公開される国際会議。
はてさて、世界各国の当事者たちが、何
を語り、何を伝えたいのか。どうかみな
さんも自身の耳で、しかとご拝聴あれ。

さて、生殖医療といえば、近頃、マスメ
ディアの「卵子の老化」にスポットを当てた
テレビ番組や新聞報道が続く。奇しくも、
その報道に一喜一憂するのは、不妊当事
者ばかりではない。社会的キャリアを持つ
妙齢の独身女性たちも、“他人ごとでは
ない”と口々につぶやく。「子どもを産み家族
をつくる」という、自分で意識しない限り全
く問題にならない、という不思議なテーマ
の中心には、晩婚化・晩産化・不妊という
社会的課題が当事者を取り巻いている感
がある。

筆者の知るところによると、自宅で長年
家族の在宅介護を担う、こころ優しい娘や
息子たちも、晩婚・晩産・不妊といった報
道を目にしたその日から、自分の人生を
家族のために使い果たしてきたことに気
づくという。人がその状況になるまでには、
その人なりの理由や事情がある。ある介
護職者は、「私たちは介護を必要な方
のお世話をするのが仕事だけれど、一番き
つい思いをしているのはご家族です。な
かには、仕事と介護で精いっぱい、自
分の楽しみや結婚も、とうの昔にあきらめ

ているご家族もいる。そのようなご家族に、
ご自身の幸せも大切にしてほしいと、今度
お話ししてみようかと思ひます」と語った。

うへは、現在継続開催中の家族ワーク
ショップで知り合ったケアマネさんとの会
話だ。島根県松江市で続く家族理解ワー
クショップも、今年で3年目を迎える。児
童・高齢者福祉、医療、教育、心理、行政、
司法の各領域から集う援助職の有志達
が、団士郎教授の教育指導と事例検討会
のセッションに集中するその姿は、頼もし
い助っ人たちが力をつけていく様を見るよ
うで毎回まぶしい思いがする。引退後は、
彼らのいる島根県で安心して暮らすのも
いいかと、ふと考えてしまうほど。本件に
関するお問い合わせは、島根家族援助研
究会 simanekazoku@yahoo.co.jp まで。

今年が攻めとチャレンジの一年になり
そうなる予感がする。9月は、前述した「不
妊患者団体国際会議(於:立命館大学)」
に続き、「生殖テクノロジーとヘルスケアを
考える研究会(於:東京大学)」、日本生殖
看護学会(於:国際医療福祉大学)での発
表。10月に入ると、「日本生命倫理学会
(於:立命館大学)」、以降、日本生殖医学会
(長崎県)ほかで講演・発表の予定がある。
今月はすでに、島根県医師会・島根産科
医会総会での発表を終え、結果は上々。
これらは、当事者支援の社会システム拡
張を狙う、私の研究戦略の一環である。

願わくば、母よ、こんな娘を見届けてほ
しい。あなたの最期は、私が看取るのだ
から。

尾上 明代

今号で、「小さな『怪獣たち』とのドラマ
セラピー」の連載を終わりました。

A施設での実践については、忙しさに紛
れて、せつかくとってあった記録を振り返
って評価することをしておらず、このマガ
ジンへの連載で、その作業をすることがで
きました。PCに向かって執筆しながら初
めて気づくことも多々あり、3ヶ月に一回、
私自身にとって興味深い内省の時間が持
てました。

編集長、そして感想やコメントを下さ
した読者の皆様、ありがとうございました。

次号からは、まだ何について書くか決め
ていませんが、8月までに考えます…。

木村 晃子

この4月には、介護保険の報酬改定が
ありました。毎度、改正(改悪?)の度に、
制度が使いにくくなっているのは否定でき
ません。利用者さんに対しては、「制度が
変わったのでごめんなさい。」そんな簡単
には済まされないな、とケアマネジャーと
して感じています。生活者の権利を守る。
何だか悪戦苦闘した、3月4月でした。一
頃、利用者さんの要望ばかりを受け入れ
るケアマネジャーのことを「御用聞きケア
マネ」などと揶揄されていましたが、御用
聞きとは、利用者さんの要望だけでなく、
国の御用聞きケアマネであっていいな
い~と感じます。若いのか、青臭いのか、
よくわかりませんが、時には声を大にする
こともありながら、出来る限り職業倫理に
則りプロフェッショナルな仕事をしたいな
と思う今日この頃。またどこかで私の叫
び声が聞こえるかもしれません。

北海道 当別町 普段はケアマネジャ
ーとして高齢者支援をしています。

団 遊

スカイツリーが OPEN しました。私の事
務所のひとつが蔵前という下町にあり、窓
からツリーが丸見えです。毎日ライトア
ップが違って、美しいですよ。そんなスカ
イツリーですが、運営主体は東武電鉄です。
これがなかなかに冴えない電鉄会社で、
おひざ元のソラマチというショッピングセ
ンターも、いまいちニュース性の低いお店が
並んでいます。奇しくも同時期にヒカリエと
いう東急電鉄主体のショッピングセンター



が渋谷にでき、より一
層実力差が浮き彫りになってしまいました。
また、OPEN 初日は、その日に限って雨。
前後一週間、雨はなかったのに、まるで
嫌がらせのように、雨でした。さらに強風
で営業時間終了前にエレベーターを止め

ないといけない始末。地元っ子たちは、「無理して建てても、やはり東武だねえ」と囁き合っています。関西出身者としては、そんな東武に、弱小だったころの阪神タイガース&阪神電鉄を重ね合わせています。

藤 信子

7月中旬にIAGP(国際集団精神療学会)に参加するために、コロンビアに行くことにした。すると多くの人から、なんと!!…大丈夫ですか?と聞かれる。コロンビアと聞くと、麻薬や誘拐などを思い浮かべるのだと思う。私も最初はちょっと躊躇したけれど、今は大分落ち着いているらしい。JAGP(日本集団精神療学会)が続けている「東日本大震災関係者の相互支援グループ」の報告の共同発表者として行くのだけれど、昨年のLondonの15th European Symposium in Group Analysisで多くのグループサイコセラピストが日本の震災について心配してくれていたの、少しは報告があるだろうという判断からだった。それにトラウマへのアプローチに関して、私は中南米のコミュニティ心理学に関心を持ち始めているので、行ってよかったと思った次第。会場はカルタヘナというカリブ海に面したユネスコの世界遺産の町だけれど、なかなかピンと来ないのでコロンビアの旅行書を読んでいる最中である。

水野 スウ

5月の秋田に行ってきました。県の職員さんが、たまたま旅先の金沢21世紀美術館のショップで「ほめ言葉のシャワー」の冊子を見つけてくれて、そのご縁で、健康福祉課からの出前注文をお受けしたのです。けれど石川からはかなりの遠さ。飛行機を乗り継ぎ、宿に2泊するのに、話は正味2時間弱。あらあら、なんてもったいない。そこで、「ほめシャワ」冊子つながりの秋田の若いお母さんに、ちいさな出前紅茶しませんか、と声をかけたら、早速、10人サイズと20人サイズ参加費ワンコイン、のちい出前を二つ企画してくれました。

会場の一つが、週に2日、自宅でサロンをひらいているという人のお家。「赤ちゃん連れでゆっくりできる、実家みたいな場所がほしいな」と、家主さん自身が子育て真っ最中だった7年前にはじめたとのこと。ちょっと紅茶みたい。違うところは、1回ごとに300円の利用料をいただくこと、また別枠で、ベビーマッサージ体験、マタニティママ用写真講座、虫除けスプレーづくり、等などの、ごく少人数制の有料ミニ講座も度たび展開してるとこ。



その日の紅

茶に参加した人の中には、助産師さん、コミュニケーションファシリテーターで栄養士さん、押し花インストラクターさん、サロンで作品展示中のガラス作家さんもいて、その人たちにとっては、そこが自分の仕事を表現する場にもなっている模様。家主さんにも、その場を利用する人たちにも、講師役の人にも、負担のかかりすぎないシステムで運営されてる、その知恵と工夫がよいなあと思いました。

紅茶の時間をはじめた昭和の時代には、子育て支援、って言葉自体、あんまり聞かれなかった気がします。今は行政がお金を出しての、支援センターがあちこちに。曜日ごとでセンターをはしごするお母さんたちも結構いるようで、密室育児にならないのはいいことだけど、いつも他人がたくさんいてにぎやかすぎないかしら、母とおさな子だけでしっかり静かにむきあう時間ってのも必要なんだけどな、と、親しい金沢の絵本やさんが少し危惧してたのを思い出します。

秋田のサロンは、サイズこそミニだけれど、

行政の支援とはまた違う、子育てをあたたくほっこりと支える場を、ひらく人来る人かかわる人とで、ともに育てて行こうとしている場のようだ、とうれしく感じながら帰ってきました。

さて次の本の原稿書きは、いまだ続行中。けれど本の生まれる日だけは、今年11月の紅茶の時間29歳の誕生日に、と先に決まっています。このマガジンが印刷されて本になるころには、もう“出産”まぢかかもしれませんね。

週いちオープンハウス「紅茶の時間」の家主。石川県在住。

「紅茶の時間」URL

<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

山本 菜穂子

異動です。せっかく児童相談所に戻って、やっと課長という職責にも慣れてきて、これから少しは役に立てるかなと思ったのに。(これ自体が幻想とは思いますが…)次は何年後に大好きな児童相談所に戻れるでしょう。大好きな仕事は頑張れるのにな~。良い仕事するのにな~。(いるときには決して言えないことばです。)今時、児童相談所を希望する職員も少ないと思うのに。置いておけばお得なのに。(ハハハ、ちょっと空しい、無駄なつづやき)

これからしばらく、また、本庁に行きます。今度は、健康福祉政策課包括ケア推進グループ。青森県では15年も前から、「保健・医療・福祉包括ケアシステム」という考え方を打ち出していて、高齢者だけでなく、命を授かってから亡くなるまでの全ての住民が健やかで安心した生活を送ることができるよう、必要な機関が適時適切に連携してサービス提供できる仕組みづくりをしようと謳ってきました。それを推進するための仕事です。

24時間365日携帯電話を片時も放せない気分!という圧迫感からは解放されます。それをせめてもの唯一のメリットとして、気持ちを切り替えて、しばらく行ってきますね。まずは、私にできることを誠実に探ってきます。

脇野 千恵

最近、沖縄三線を始めました。いくつかの手習いになるのかなあ？弦のある楽器は、ギターを高校生の時に少し、琴は随分と長くやった記憶があります。

5、6年前に沖縄で買ってきたのですが、家族から「あれはどうするんだ！」と言われ続けていたので、少し言い返せるかなと思っています。習ってみて、たかが三線とちょっと軽くみていましたが、なかなか奥が深い楽器ということがわかってきました。いや楽器というものは、奏できるようになってくるとそう思うものなのでしょうが。

三線は弾き語りができなくてはなりません。それにはまだまだ時間がかかりそうですが…。しばらくは、三線で日頃の疲れがとれることでしょう。

岡田 隆介

4月上旬に、生まれて初めて入院・手術を経験しました。家族年齢が着実に上がっていることを知らしめた今回のエピソードは、ちょっとした我が家の”有事”です。家族は、楽しみではない映画の予告編をみたような気分になりました。有事より無事がいいに決まってるけど、絶対に避けられない日を迎えるためにこうした事は有らねばならないと受け入れました。

仕事から病院にはなじみがあったのですが、パジャマを抱えて正面玄関から入るのは初めてです。入って最初に意識したのは、治療する側と受ける側を分ける太い線です。受ける側の頼りなさに対し、スタッフの自信と潔さのまばゆいこと。ウチらの業界では、そのあたりをあいまいにするのが習わしです。少なくとも、スタッフが頼もしく映ることはないでしょうね。

時間だけはたっぷりあったものですから、いろんなことを考えながら、毎日、ブルーな窓からピンクの桜を眺めていました。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

3月末に寺の境内地の一角に住まいを建てて、引っ越しました。それまでは、賃貸マンションから寺に通勤をしていました。

住職ではあるが寺に住まいがありませんでした。不住職でした。深夜や早朝の電話対応には苦勞をしたものです。家賃分をローン返済に充てて住居を建てることにしました。なかなか住宅ローンが組めませんでした。銀行で、住職が住宅ローンをするなんて珍しい、信徒に寄付を募るのが普通ですよと言われました。普通はしないらしいお寺の住宅ローンが何とか叶いました。担保設定上、境内の一角を分筆して建築しました。そうすると新築になります。寺の建っている地域は、市街化調整区域と言って住宅の新築が認められない地域です。特に就農者でない者が新築をするには厳しいようです。田舎に新たに人は住みにくいようです。田舎に老人が多いのは日本の住宅政策にも一因があるようです。なにはともあれ、新居ができました。寺の一角にアメリカンな家ができました。先日、留学から帰国した若い人が遊びに来て、家に入るなり「日本の家じゃない」と言いました。思わずにんまりしました。

川崎 二三彦

今年は居眠り運転による高速バスの大事故をはじめとして悲惨な交通事故のニュースが続き、京都府でも祇園や亀岡で死亡者多数の重大事故が発生した。そこで私もクルマ社会の現状について考えてみようと思う。ただし、皆さんにまずお伝えしておきたいことは、今私が所持している



自動車運転免許証には、ご覧のとおり「優良」の文字が刻印されており、裏面にも違反の記録など全くないということである。

*

ある夜、国道を一人で車を運転していたときのこと。高級車がいきなりリターンして私の進路をふさぐ。

「ワリヤー、どういづつもりや！」

中から出てきた男性はいかにもがらが悪く、胸ぐらを掴んで威嚇する。きょんとしたまま話を聞いているうちにわかったことは、どうやら私の車がセンターラインを越えたため、危うく衝突しそうなものらしい。

「そうか、居眠り運転してたんだ」

と気づいて、あとは平謝りに謝って何とか切り抜けた。が、これはニアミス。居眠り運転というなら、停車中のタクシーに追突してからやっと目が覚めたこともあり、家族で遊園地へ出かけた帰途、タイヤが側溝に嵌り込む自損事故を起こし、ために怪我した妻と子どもが救急車で病院に運び込まれたこともあった。でもご安心あれ、これらはいずれも30年以上前のことである。

かつてバイクに乗っていた時、速度を守って左端を直進中、追い越した車が急に左折したため、あっという間にはねられるということもあった。しばらく動けず、休養中のアパートに見舞いにやってきたのが、その後結婚した妻だったような気がするが、もう忘れた。それはともかく、バイクがだめなら自転車しかない、10 kmの距離を自転車通勤しよう一念発起、ドロップハンドルの自転車を買ったのはよいとして、1週間後、薄暮の中を何かと借りがある妻の待つ自宅に向かって走っていたら、反対車線を直進していた車が突然右折してきて吹っ飛ばされたこともあった。が、ご安心あれ、これらも遠い過去の話。心配には及ばない。

さて、6、7年前のこと。信号で車を停止させていた私は交通ルールを遵守し、信号が青に変わったことを確認して発進させた途端、雷に打たれたような金属音を聞きつけて急停車した。ふと見ると、そばにはミニバイクが転倒しており、車の横腹には直線の傷がなまなましい。バイクを運転していたのは80歳を超えた老人。信号停止中に私の隣に並んだのだが、車が動き出したことに驚きバランスを崩したらしい。この人、転んだだけと思っていたのに骨折して救急車で運ばれ、1か月以上の入院と相成った。でもご安心あれ、私は警察に呼ばれて取調べを受けたけれど不起

訴となってお咎めなし、老人も何とか回復したはずである。

*

というようなクルマ社会の現状を皆さんにもご理解いただけたと思うので、近況を報告する。ついこの間、車でスーパーに行き、所定の場所に駐車すべく慎重にバックギアを入れた。その直後、クルマが急発進してぐんぐんスピードをあげるではないか。後方発進だからもうパニック状態。急ブレーキを踏んでも止まらず、コントロール不能に陥ってしまった。

「危ない、ぶつかる！」

と、今度は夢中でサイドブレーキを引いたら、間一髪かるうじてセーフ。車は音もなくスムーズに停止した。

ふうっと胸をなで下ろした私は、あらためてあたりを見回し、すべてを理解した。買い物を終えた客が隣の車を発車させたための錯覚だったんですよ、これ。手にはまだ冷や汗が残っていた。

*

えっ、「今まで生きていることに感謝せよ」ですって？

早樫 一男

○仕事の上では...、4月から相談を受ける機会を増やしました。昨年、長年の公務員生活を一区切りする際の願いであった「相談現場や相談業務に戻りたい」ということが充実してきました。

そもそも、大学での授業、心理臨床センターでの相談業務、そして研修講師など、

毎日、あわただしく過ごすことができていること自体、本当に恵まれていると痛感しています。

○個人的には...、長女が大学を卒業し、就職しました。長男・次男はすでに就職・結婚し、それぞれ子育て中です。

三男は引き続き大学に在学中ですが、夫婦中心の家族になる時期を迎えつつあります。

「家族のライフサイクル、発達段階を一つ一つ経験してきたんだなあ」と、ふと、感慨にふける自分の気が付くことがあります。

というような中で、公私ともに、これから

も、できることをできる範囲でやっていきたいと思っている今日この頃です。

西川 友里

いくつかの学校で、対人援助職養成をしています。

現在は4月入学をした社会福祉士養成通信課程の学生の実習先を探すため、担当学生に一通り面通しをしている真っ最中です。「今年もいろんな人が入ってきたなあ...」最近、福祉とは直接関係のない、新たなジャンルの専門職の方がたくさん入学なさいます。ちょっと前までは福祉施設の職員やケアマネが多かったのですが、ここ最近では学校心理士、少年刑務所の刑務官、警察の少年課の職員、経営学部の大学院生、元IT企業の重役さん等々。お話していると、新しい世界が広がるように思います。またそういった方々の中から、「NPO法人を作りたい」「社会企業家になりたい」と言う方が、若干ですが増えてきているように思います。震災から1年たったことで、改めて地域貢献の意味を考え、長期的で継続的な社会貢献活動とは何かを考える機運が高まっているように感じます。

ところで今回の本文に書いた父と母とのやりとりは、初めて公言したことです。母、長らく内緒にしていたゴメン。子どもの時の事なんで、時効ってことで、許してください。

中島 弘美

家族面接でときおり話題にあがるのは、両親の不仲です。

お父さんは一週間に一度しか家に帰ってこないとか、子どもたちが義務教育を終了したら離婚するとか、夫婦喧嘩を目撃した子どもたちが、親が離婚をしたらどちらといっしょに暮らそうかと考えていたり、両親の様子を敏感に感じ取っていることをたびたび目にしました。

昨年11月に開催された第3回対人援助学会で、「離婚を経験する子どもと家族の支援」の発表に強く関心を持ちました。アメリカなどでは、子どもを持つ親が離婚をするときには、特別なプログラムが準備

されています。日本の家族にも必要だなあと思って、周りにいる社会福祉士や弁護士、離婚経験者に話をすると、みな同様に支援の必要性を感じていることがわかりました。

最近、そのプログラムについて少しばかり勉強させていただく機会があり、(対人援助学会会員のご紹介があって実現しました。ありがとうございます。)改めて必要だと再認識しています。

アメリカとは文化が異なりますが、離婚つまり親の事情によって、子どもの生活に大きな変化があるとき、子どもと家族に対して具体的に役立つ(たとえば、講座のような)ものの用意と、その講座を受講するためのシステム作りが必要だと思っています。

関心がある人たちが集まると、アクションが起これると思うのですが、みなさん、ご関心はおありではないですか？

千葉 晃央

「『北の国から』の再放送を連続でしているの観ました？よかったですわ～。この年齢になったからわかることも多くて発見でした。ほんで、倉本聰の本を探したけどみつからなくて」

「そうなんや、私はあの人の家族のみせ方あんまり好きじゃないわ、向田邦子の方がどちらかというとききやな。向田邦子読んだ？」

「読んでないです」

「そうや千葉君！あんた家族療法とか家族のことやっているんやったら、向田邦子読んどかなあかんわ」

そして読んだのが「阿修羅のごとく」

「先輩！読みました。確かに違います！なんというか、品というか、葛藤の描写というか」

「せやろ、女性作家やからかもしれんけど、といってもあの人自身は家族持たず生涯独身やしな。」

「おもしろかったです！次、何がお勧めですか？」

「う～ん『美は乱調にあり』瀬戸内晴美」

「瀬戸内晴美？」

「今は寂聴！」

「あの？」
「そう、あの。大杉栄と伊藤野枝の話やで」
「大杉栄...伊藤野枝...あの?!」
「そうそう、あの?!」
こうした先輩との会話がとても楽しくてたまりません!!!

三野 宏治

新年度になり秋田から群馬に引っ越しをしました。職場移籍に伴う引っ越しです。一年しかいなかった秋田ですが寂しさを感じます。引っ越しの日にゼミの学生が訪ねてくれて、二男の誕生祝を渡してくれました。引っ越しの作業中に庭の隅に腰を掛けて彼らと弁当を共にしました。どうという会話ではなかったのですが、大変楽しい時間でした。

新しい職場の研究室の窓からは赤城山がみえます。大きな赤城山を見をながめ、引っ越しの最中の楽しい時間を思い出しながら一人昼食をとっています。

浦田雅夫

いよいよ京都で、子どもシェルターが開所します。孤立無援でホームレスの子どもたち、家はあっても居場所がない子どもたち。そんな子どもたちが、安心できると思えるような場を提供できるよう、支援者のみなさんと取り組んでいます。ぜひご協力ください。 <http://www.nonosan.org/>

中村 正

勤務する法人の管理職をしてまる5年が経過し、6年目に入った。学校法人なので企業とはまるで異なる論理で動いているし、根は大学教員なので、どことなく雇われ管理職という感もある。とはいえ、マネジメントには責任が伴う。どちらかという学校は「永続性」がテーマなので、百年企業ということを重視したマネジメントにしたいと思っている。ミレニアム組織なのである。百年前にどのくらいの企業があっただろうか。これから百年後にどのくらいの企業が残っているのだろうか。それと比べると、大学はやはり百年後も持続させることに意義がある。そのためにはこつこつと

した教育と研究が欠かせない。基礎的なことを、どんなことでも知的な関心をもつ営々とした取り組みを支援するようになりたいと思っている。すでにいない百年後のことを考えて今できることを丁寧にしていきたいものだ。そのために忙しいなかで精力的に映画や演劇やおしゃべりを楽しむようにしている。この間もたくさんアートに触れることができた。アートはまさに時空を超えた価値をもっているからだ。

サトウタツヤ

4月から慣れない仕事につくことになり、コールドの海を泳いでいるような感覚。まだ2ヶ月しかたっていないのか、という感じ。毎回思うのだが、この『対人援助学マガジン』は、締め切りがきっちりしていてすごい。私など、1週間おくれ、1ヶ月おくれ、ついには1年おくれ、などという世界で生きているので、反省しなければ、と思いつつ、本年3月締め切りの原稿をどうにか完成させようと、5月末の今、もがいている。。。

大野 睦

水害、震災、竜巻、火山の爆発。すべてが自然の営みであり自然現象から始まることなのだろうが、それだけではない間接的人災の大きさを特に実感することがここ数年増えているが、その警鐘を私たちはきちんと受け止めることが出来ているのだろうかと考えることも増えている。自然の営みとはその厳しさ故の美しさがある。そのどちらも私たちが生きている世界なのだとして少し足を止めてみてはいかがだろうか。

ネイチャーガイド 大阪で生まれ育ち、大学を卒業後に屋久島に移住。有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

坊 隆史

最近、初対面の人から「男の援助について書かれていますね」と言われることが度々あった。どうやらネット検索で私の氏名を入力したら本誌がヒットするらしい。

連載第1回しか読んでいない方には「オチンチンの人」とも言われた。ウェブマガジンの力と恐ろしさを感じた。今号はもっと刺激的な内容なのでどのような異名がつか楽しみである。今後も私たちは対人援助学マガジンの過激派を目指していくつもりである。(ぼう たかし)

松本 健輔

カウンセリングルーム

HummingBird 主宰

<http://www.hummingbird-cr.com>

この四月から専門学校で教えるようになった。自分より一回り以上歳下の生徒相手にいろいろ伝えようと悪戦苦闘中。

その中で、たまたま体罰の話題になり、生徒達に体罰など暴力を使った教育の是非を聞いていた。実に8割以上の生徒が絶対どんな状況でも暴力はダメと。人の意識は確実に変わってきていることを実感。

団 士郎

ツイッターとfacebookがすっかり私の日常にとけ込んだ。多少時間は取られていると思うが、普段なかなか交流しない人と不思議な距離感でいられるfacebookが最近とくに楽しい。

元々DAN通信というミニコミ(郵送版)を長らく出していたので、ツイッターのような方式には馴染みがあった。

ワープロ、PC、携帯電話 ipod、itouch、iphone、ipad と道具も楽しんできた。道具好きでも手段マニアでもないが、新しい物で出来る新しいことが広がるのは好ましい。

先日の facebook での出来事はおかしかった。私が岡山の家族勉強会に向かうべく京都から乗った新幹線に、神戸からfacebook 仲間が乗ったらしい。「今、新神戸、これから新山口へ」なんて書いてある。「私も乗ってますよ、岡山までだけ」と送信。すると岡山到着直前、「今見ました、5号車にいます」と返信。私は13号車だった。面識のない人だが、そのうち会えるだろう。だんだん接近遭遇しているなと思ったりした。